

## 講演2

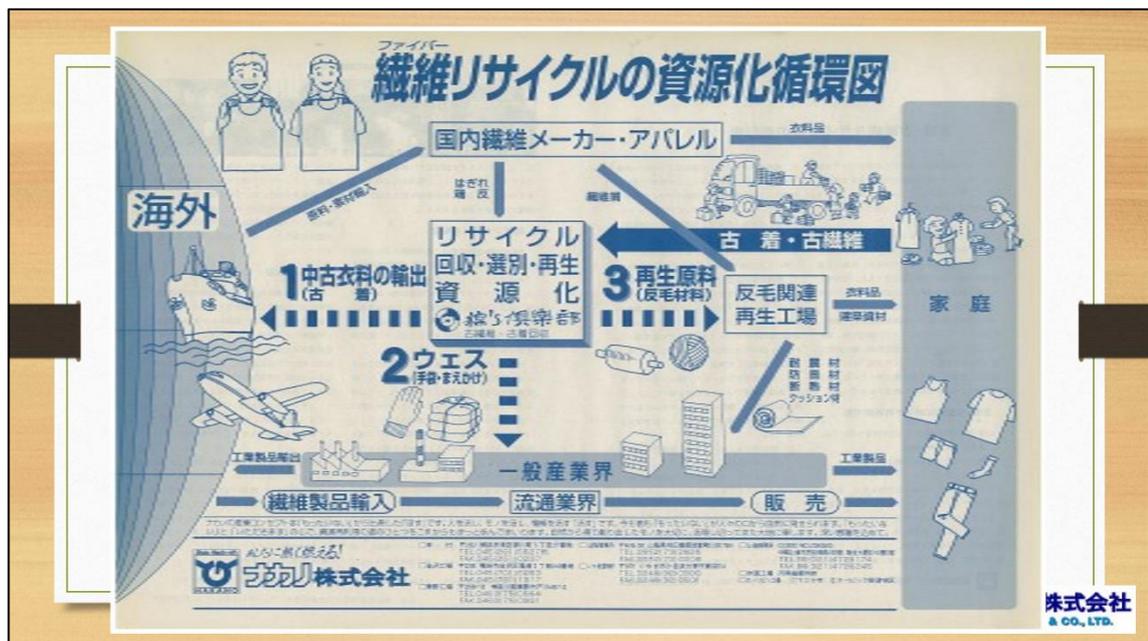
### 古着はいずこへ

ナカノ株式会社リサイクル部 内田 長

コメンテーター 山本耕平

13

皆さん初めまして。よろしくお願いします。ご紹介をいただきましたナカノ株式会社の内田です。私、横浜からまいりまして、会社のことを少しお話をいたしますと、会社ができあがったのが昭和9年。もうすぐ87年を迎えるという会社でして、古着・古布繊維、いろいろな言われ方、ボロといった呼ばれ方もされますが、そういったものを手掛けてそれだけの年月が経ってやってきたということで今回お話をいただきまして、この場を借りて少し古着の流れを、繊維全般、どのようにリサイクルされ、流れていくのかということをお話申し上げたいと思います。



ちょっとこちらの図をご覧いただきたいのですが、これ、私どもの秦野工場。神奈川県の西の方ですね。秦野市にある秦野工場というところで、見学者。ちょっと古着のことについて知りたいという方々を受け入れしまして、工場の中をご覧いただくツアーみたいなことをやっています、見学会ですね。簡単に言うと。その際にお配りしている資料でございます。これがですね、1993年に実は作ったものでして、端っこの方がだいぶ黄ばんだり、実物を手に取っていただければ分かるのですが、ぜひそういった機会があれば工場にお越しいただいて、今日ご興味を古着のことに持っていただけたら、その際はお問い合わせをいただいて、お越しいただければ、もっともいろいろなお話ができるかと思えます。まずこちらから、全般の流れをザッと見ていただきたいと思えます。

右側に家庭と縦帯がありますね。左側にこれは地球をモチーフにしたと思うのですが、海外と書いてあります。その当時から、93年当時からこういった大きな流れ、仕組みは変わっておりません。山本会長からお話がありましたが、何年もこういう話をしてると言えばしているのですが、若干その中でも動きがありまして、今回で言えばコロナですとかあるのですが。まあ基本的な形は変わらずに、何とかできあがった仕組みを守って継続していこうという力が働き、経営が続いてきたところです。

これ見てみますと、非常にグローバル、国際的な流通をしているんですね。しかもですね、日本で流通している繊維製品というのは、9割が海外製ですね、現在。国産のものは1割ほどしかありません。パッと思い付くところでは今治のタオルですとかね。工場で使っている制服・ユニフォーム。あれは中国地方の岡山とか広島で盛んに作られていたり。それも大部分は中国とか東南アジア、インドとか、バングラデシュとかあちらに移っていますが、特殊なものは日本国内で作ることもされています。大体9:1ですね。海外でできて、日本の皆様のご家庭まで届いて、我々の立ち位置は真ん中ですので、リサイクル、回収・選別・再生、資源化とありますが、この四角いところです。我々のようなボロ屋さんって言うんですがね。古繊維問屋と言われているのですが、そういったところで選別して、古着として利用できるものか、ウエスとか、再生原料の確保。これは反毛と呼びます。後で詳しく1、2、3についてお話をします。こういう流れが存在しているのだということを最初に頭の中に止めておいていただきたいと思えます。

グルッとして、結局海外にかなりの割合で、非鉄・鉄、それから紙以上に布というのは、実は海外の方にリサイクル先と言うか、出口を求めて実は流通しております。我々はこれ、うちの会社、ナカノ株式会社での仕組みを図式化したものなのですが、預かった古着をそのまま海外に持っていくところもあるんですね。そうすると、そういった会社は100%になりますし、我々は一部。選択肢が三つあるのですが、そのうちの一つとして海外にも輸出をします。古着として海外に流していますよということになります。全国的に見ておそらくですけども、回収されたもののうちの、データがないので、組合とかで北から南から業者さんが集まっているいろいろな話をする中で感じるのですが、

6割から7割はおそらく海外の方に古着は流れていますね。そういった形を現在採っています。

回収の仕組みも松本理事長からお話がありましたが、家庭から我々のところまで届くルートと言いますか。アパレルとかメーカーからは直接繊維くずですとか、残糸という形で直接お預かりすることもあります。家庭からは行政回収・集団回収、それから店舗回収ですね。あとは個人だけの流通という意味では、ネットなんかを使って個人で売買される、ああいったものも該当すると思います。店頭で回収されている下取りであったりとか、サービスクーポンが配られたりとか、いろいろな形が採られているかと思うのですが、多くはですね、そのお店の方が独自にリサイクルされる場合もありますが、多くは我々古繊維問屋の方に声が掛かって、これ受け取ってもらえませんかという形で話が来ます。紳士服とかでデパートとか、いろいろやっていると思うのですが、業界の方に声が掛かってきておりますので、我々が預かって私どもにしたら中古衣料、ウエス、それから再生させてリサイクルルートに乗せることをさせていただいています。ただ、全部が全部と言われるとちょっと分からないです。追い掛けたことがないので、でも、大部分はやっぱり企業さんもね、SDGs じゃないですが、サステナビリティといった観点からもしっかりと。おかしなことをやると今はすぐに炎上して商売ができなくなりますから、それなりに責任を持ってリサイクルのルートに乗せるという努力をさせていただいているはずですよ。

布についてはですね、法整備がまだ整っていません。私ども、ナカノで持っているマーケットの規模によって、取り扱える品目であったり、価格帯というのがどうしても定まってしまうんですね。そこがちょっと古紙とか鉄とは違うところかなと思っています。

先ほど説明しました1番、2番、3番について、順番に少しずつこういった形を取っているか。こういったものがどういう形でというご説明をさせていただきます。

## 1. 中古衣料(古着)として再利用

国内、海外で古着として再利用。

意外なものでは...

肌着・下着類、タオル類

帽子や靴下

毛布、カーテン、カバン類 etc



1 番。古着としてですね。こちらは私どもでお預かりした中の全体ですね、2020 年度版の数値では 28%です。コロナとかいろいろな影響を受けた後ですが。一時期古着の海外から引き合いが非常に強い時期がございまして、古着をやりとりするキロ当たりのお値段が高騰した時期があったのですが、それも過ぎまして、今は 28%。その高騰した当時ですと、60%あまり。ですから、非常にいい状態で我々の方でお預かりすることができている。家庭で出て回収業者さんが回収してくださって、我々のところに届けてくださったものの中から 60%ぐらいまで行ったことがあるんですね。だけど、現在は 28%というところまで落ちています。その中の男性・女性・子どもの割合ですが。男性が 21%、女性が 30%、子どもが 28%。男性はあまり洋服を買って消費をしない、捨てない。女性はたくさん購入してたくさん排出される。子どもは何となく分かると思いますが、ワンシーズン過ぎると着れなくなることはよくあることで、自ずと現在ですとお下がりとか、近所にお配りする習慣がなかなかないので。私が幼い頃はまだいとこのお兄ちゃん・お姉ちゃん、ご近所の年長の方からお洋服をちょうだいすることはありましたが、地域的なこともあったかもしれません。今は人が着たものなんてというのもあるかもしれないですね。なかなか今はそういう習慣がないのかなと。昔に比べたら減ってきたという受け止め方をしていますがどうでしょうか、皆さんのところでは。

で、そんな中で、日本の常識って結構海外で通じないところがあって。特にこの古着はですね。意外なものでリサイクル・リユースで使っていただけるのですよというので書かせていただきましたが、肌着・下着類。それからタオルですね。バスタオルでもフェイスタオルとか、タオルでできたハンカチのようなものですね。それから、帽子や靴下。毛布・カーテン・鞆類。代表的なものとして書かせていただきましたが、肌着・下着を誰に使っていただくために出すって、特に女性の方は抵抗があると思うんです、日本ですと。海外ですと、これが本当に必要で困っていて、欲しがって必要としている方が大勢いらっしゃいます。海外で古着を必要としている方が 30 億人ほどいらっしゃると言われていますが、なかなか届かない。

日本って古着ってファッション的な要素がすごく強いと思うんですね。誰々さんが着ていたビンテージとかですね。何とかという時代の開拓者たちがこういったスタイルとかですね。でも海外は違うんですね。本当にその日その日着るものがないと。新品はいっぱい流通しています。日本に比べたらはるかに安く流通しているのですが、それですら手が届かなかったりするんですね。ですので、古着をとてとても必要としています。写真が見つらいかもしれませんが、これ実際に現地で洗濯板と言いますか。日本ではほとんど目にすることはないと思いますが、それを使って河原に行って、手で洗って干してアイロンを掛けて干してある状態なのですが。T シャツは T シャツ、G パン。これもまた面白くてですね。世界の古着が流通してしまっていて、地球上で見えていくと、北側から南側に流れていくという大きなものがございまして。私どものアジア圏で言うと、古着が今発生するのが日本、それから韓国・台湾。中国も今古着を輸出しています。沿

岸部だけですが。そのまま赤道を渡って南下して、東南アジアのこれはやっぱり輸送する上でのコスト。それから体型ですね。同じアジア人ですので、似たり寄ったりのところがあってサイズもマッチすると。当然南米ですとか、アフリカ。逆に北のロシアとかモンゴルとか、古着の需要があって声が掛かるのですが持っていきません。価格が駄目ですね。この価格でこういった品質のものが欲しいと言われるのですが、持っていくことができないんです。サイズのにもですね、私そこそこ大きい方だと思うのですが、私でロシアだと中学生ぐらいですよ。成人男性だと S だとこんなになっちゃうと思います。日本の冬は結構暖かいので、軽めの薄手のダウンとかはやっていますが、そういったものを持っていても役に立ちませんで、それこそ。すぐ凍傷になっちゃうんですね。下手したら死んじゃうかもしれないですね。マイナス 40 度、50 度ということ。そういったことでなかなかマッチしていかないということがあります。それからヨーロッパはいいんです。昔統治していたこともあるし、やっぱり距離が近いんですね。ストレートに北から南にまっすぐ行けるんですね。それから北米のカナダですとかアメリカから南米の国に流れていきます。若干私どもも運べるものがあるので。でも、主たる流れはアジア・ヨーロッパ・北米・南米です。

## 2. ウェス(工業用雑巾)として再利用

工場、作業現場等で油拭きや緩衝材として利用。

- 機械の整備
- 製品や部材の接触による損傷防止
- etc



中納川株式会社  
NAKANO & CO., LTD.

2 番目がウェス。これなぜウェスと言うのかですが、英語のウェイストから来ているのではないかとされています。ウェスは工場とかで使うぞうきんのことですね。お洋服を回収して集めていただいたのですが、汚れていたり、虫がいたずらをしていたりとかですね。ダメージを負っている部分があったりして、そういったところを切除するんですね。これはスウェット地ですが、タオルに準じるボリュームがあって、水・油を大

変よく吸ってくれます。このウエスって非常に面白い商品でして、新品のタオル。お風呂上がりを使うと水を吸わないじゃないですか。紡績で繊維を織ったり編んだりする時に、紡績油という油を塗って、番手のばらつき、糸の太さがばらついたり、織ったり編んだりする時のムラがなくなるようにしなやかに製品化するために油が塗ってあるのですが、その油が抜けるまで水をなかなか吸わないんですね。で、家庭で洗濯して使っていただくことを繰り返す中で、その油が徐々に抜けていってですね。工場ですべていただくぞうきんとして非常に優れたウエスというものになってしまっているというか、お預かりする段階でなってくると言いますか。新品ももちろん集まってくるんですが、使わなかったものとか、いただいたものをそのままとかありますので、そういったものも入っておりますが、家庭で使い古されたものがウエスとして非常に良い商品になるという面白い特徴があります。ものを拭くだけじゃなくて、例えば製品と製品を重ねたりとか、立てて寄り掛ける時に傷が付かないように間に挟み込んだりとか、クルクルと丸めてボリュームを持たせて緩衝材に使ったりということでも使われています。

古着で補足させてください。古着ってほとんど実は海外なんです。国内でいろいろな古着屋さんがあって、若い方々が原宿・渋谷・下北沢・高円寺あたりが有名ですが、あれは数%です。我々業界でお預かりしている中では。ファッション性がないとか、付加価値がないと駄目なんです。なので、28%のうちの数%が国内です。

ウエスは20%ぐらいです。これも実はコロナの影響を受けています。工場が止まっていますので。ないし人数制限を設けたり、時間制限を設けて稼働日数を落としています。で、20%ぐらいですね。

### 3.反毛(はんもう)として再利用

繊維を綿(わた)に戻す工程を言います。

- 古着としての要望やウエスの用途に合わなかったもの
- 自動車用のフェルト、断熱、緩衝や防音材として利用
- 弊社では、特殊紡績手袋『よみがえり』を製作



中野株式会社  
NAKANO & CO., LTD.

次に3番目。反毛です。どういうものかという、繊維を綿に戻すというその工程を表した言葉です。反毛するとか使います。反毛してどうするかという、これ分かりませんか。自動車の内側から見たドアの内側なのですが。綿にしたものを平たくしてギュッと圧縮して1回板にしたものを、プレス機とか使って型抜きをするんですね。成形プレスとかしまして、ドアの内張ですね。緩衝材だったり断熱、それから防音材として自動車にもだいぶ使われています。ただこれ、厳しいところがありまして、大資本を持った大手メーカーさんと商談するのですが、必ず言われるんです。いついつまでにこの品質でこの数量をこの価格で持ってこられますかと聞かれます。はいとしか答えられないんですね、毎回。断っちゃうと、分かりましたと言ってバージンで作った価格を抑えたものを引っ張ってくると、もう二度と目の目を見るのがなくなると。これは寂しいですね。ここはこれがですね、実は4割から5割あるんですよ。割合は変わりますが、今の現状では4割から5割を占めています。この反毛綿を作る時、フェルトもそうですが、ウールとか動物性の繊維を混ぜますと難燃性が高まるんですね。エンジン周りとかはウールの混入率を高いものを使います。逆に熱がないですよということであれば、コットンで大丈夫なのですが、そういったものを使ったりもします。これも宣伝っぽいですが、私も、フィリピンに工場を持ってまして、そちらに紡績ができるラインがございます、特殊紡績という紡績工程を踏みまして、手袋を編んでいます。簡単に言えば軍手なのですが、次のスライドでお見せしますね。



こちらですね。反毛をまずするので、こちらの。こちら左側の1番。お洋服類を1回短冊状にします。で、2番、3番で大きなドラムに剣山のように針がたくさん付い

ている機械でほぐすと言うか、むしろと言うか、するとだんだんこなれてきまして、3番のような状態になります。この状態ですと、まだ繊維の方向がバラバラでして、糸を引くことができないんですね。で、4番のカーリングと呼ばれる機械ですが、こちらの機械を通すことで、繊維の方向を全部揃えます。それを革のベルトを切って、細長くずつつながっているのですが切っていくまして、それに撚りを掛けるんですね。そのままですと抜けちゃうんですね。強度が全くないので、1分間に4,000回転ぐらいでねじっていきますと、引っ張っても抜けなくなりますので、上手な糸ができます。こちらの糸で編んだのが、私どもよみがえりと呼んでいるのですが、軍手ですね。綿のものをキュッと圧縮すればフェルトはこういった形でできます。こういった紡績なんかもしながら、清掃活動とか、横浜市なんかでは結構使っていただいています。こんな形でリサイクルのルートで、繊維というものがリサイクルされながら流れております。

繊維の回収から古着の回収、古繊維の回収というのは、松本理事長の団体ですとか、回収業者さんによって集めていただいているんですね。だから我々も違うようで似ていることをしていると言いますか。説明もかぶる部分もあると思いますし。私どもも回収をしているのですが、回収していただいたものも当然お預かりもしています。いろいろお話をしようと思っていたことが結構たくさん松本理事長のお話の中に出てきまして、飛ばし飛ばしお話をさせていただきたいのですが、時間がだいぶ残っていますが。あと会場の方で私に聞きたいことはございませんか。

## ○対談

山本 予定より早いですが私から質問をさせていただきます。まず最後にちょっとお話をしたことについてお聞きしたいのですが、古繊維のリサイクルって誰が回収をしているのですか。古繊維業者さんが回収されているのですか。

内田 地域の方と直接ネットワークを形成して、自分のところでトラックを出すという回収の形式もありますし、行政の方で回収されたものを決められた場所にストックされているものを引き上げていく形。それから集団回収等で。

山本 一番比率が高いのは。

内田 圧倒的に行政回収です。

山本 もともと古繊維は価値があるものだから、ちゃんと集める人がいて、古繊維業者さんは持ってきたら買ってあげるよという商売ですよ、昔は。

内田 古着以外の用途としては、製紙原料として紙に混ぜて使われてきました。

山本 大昔はそうですね。木綿なんかを混ぜることがあって。紙も衣類もファイバーだということですかね。それから、今全体で例えば古紙だったら回収率とか、リサイクル率とか、使用率って出ているのですが、大体繊維製品はどれぐらいと言われているのですか。

内田 業界全体ですか。東京には紙のようにしっかりしたものがないのですが。地元神奈川で言えば、ほとんど我々で4割ぐらいは回収できていると思います。全国になると、東京都などは0%です。可燃ごみに指定されているところもまだありますので、業界で言われているのは13~14%です。

山本 先ほど比率をおっしゃっていたのは、ナカノ株式会社で集められているもののうち28%が古着だと。20%がウエス。反毛はどれぐらいですか。

内田 反毛は四半期ごとにプレがあるのですが、平均して40~50%の間ぐらいです。

山本 値段が上がれば古着に行くけれども、安ければ反毛に行くという感じですか。

内田 そういうこともあります。

山本 さっきのお話で、これも不思議だなと思って。ものが北から南へ行くというのは良く分かるのですが、日本の古着で輸出されているものは東南アジアとか暖かいところですよ。冬物はどこに行くのですが。

内田 それはもう反毛です。虫食いがないものは古着として海外に行くものもあります。若干ネパールとか山岳地域があるので。

山本 今でも古着を買ってくれる国は昔と変わらないのですか。昔は中国がありましたよね。

内田 はい。実はそれが年々減っています。13億。もっといるとは思いますが、13億いらっしゃる中国。10億を超えたインド。それから、近年、17年だったと思いましたがインドネシアが3億5,000ぐらいですね。3か国とも古着の輸入を禁止しました。

山本 禁止したというのは、自国の繊維産業を保護するという。これは工業化の最初の、軽工業は繊維産業なので、そこを保護するために海外からの古着の輸入を禁止することになるわけですね。なるほど。今一番買っている国はどこですか。

内田 マレーシアですね。

山本 でもそういうことで言うと、だんだん先細りになってくる気がしますね。古着としての用途としてはですね。昔、ドイツに行ったら、みんなアフリカに言っていると。でかいトラックに靴も一緒に回収して、ボロ屋さんが靴も回収して持って行っていましたが、街の中に回収拠点がいっぱいあって、古着と靴を回収するコンテナが赤十字の事務所の前に置いてあって、靴は両方入れてくださいとかね。片方だけでは駄目って書いてあったり。アフリカには着るものがない人も、裸足で歩いている人がいっぱいいるからと言われました。そんなことでドイツには結構大きな工場がありました。

最近古着とウエスと反毛以外のリサイクルも技術的にいろいろあって。例えば合成繊維、ポリエステル系が多いですが、ポリエステルを再利用するとか、大手のアパレルが結構協力してやっていますよね。ああいう動きとか、要するに我々も着るものは本当にもったいないなと思うのですが、古着以外の用途、リサイクルについても最近では技術的な広がりもどうも出てきたような気がするのですが。長期的に見た時に、そういう新しい。多分回収とか選別とかってというのは、ナカノさんのようなところを経由するのだと

思うのですが、次の受け皿みたいなところですね。そういうのもうちょっと希望が持てるようなお話はないですか。

内田 これ実用ベースになかなか届いていないのですが、私ども横浜にあります、横浜市にも資源リサイクル事業協同組合というのがありますが、そこでも委員会を設置して、紙とか布からバイオエタノールを精製しようと。ただ、それには酵素が必要なのですが、その酵素が高くてですね。安く酵素を手に入れることができなくて、なかなか商用化まで行かないとかですね。四国にある大きなメーカーさんなのですが、ポリエステル to ポリエステルですね。そういった技術も実際にはありまして、外資の人気のあるアウトドアブランドですね。自社製品を集めてポリエステルからまたポリエステルの製品を作って、お洋服からお洋服を作ってということをやっているのですが、これバージョンから作るものの 2 倍のコストが掛かる状況なんですね。だからなかなか付加価値が付けづらくて、なかなかうまく回らないんですね。技術的にはいろいろ出てきてはいるのですが、それを市販化と言うか、採算に乗せるところまではまだ行っていません。そこが課題で、そこが乗ってくれば流通することも考えられるのですが。

山本 大々的に宣伝している気がしますが、コストが掛かって本当にやれるかどうかは。

内田 厳しいのかなと。

山本 スーツとか回収しているのはナカノさんに行っているわけですよ。大手のスーツメーカーの。あれはみんな反毛ですか。古着ですか。

内田 古着としても一部。やっぱりだいぶくたびれているのも多くてですね。なかなかジャケットの需要がないんですね。スラックスとしての需要はまだございますので、スラックスとして流通したりはしています。

山本 昔からこういう古繊維業界は、ボロ屋さんという表現もしますが、昔からウエスを作って輸出をしていましたよね。むしろそういうものがメインだった時代があって。ウエスは機械産業にはなくてはならないということで、日本は木綿の文化ですよ。ヨーロッパはどちらかというと羊毛の文化で、あれはいくらやっても油を吸わないのです。日本は木綿の文化で、木綿の着物でよく洗っているから非常にウエスとしての質が良くて、ずいぶん輸出をしていたという話も聞きますが。大正末期とか昭和初期とかというのは、貿易高でも結構な売上があった時代があったとか。

内田 トップ 10 に入っていました。

山本 だから、そういう意味で言うと、この業界自体はもともと海外のマーケットをにらんで商売をされてきて。だから海外に工場を持っている業者さんも何社もあったりするわけですが。ところが、先ほどのお話で、韓国だとか台湾だとか、中国なんかはまだ国内で回るのかもしれませんが、韓国なんかは輸出にあるわけですか。日本の人口が半分以上なので、国内での需要は少ない気がしますが。

内田 そうですね。

山本 競合するのですか。

内田 東南アジアの方で競合しますね。で、韓国国内で古着というのは、やっぱり欧米とか日本から持ってきて、海外への憧れがあって。昔の日本に似た。

山本 日本人も同じじゃないですか。原宿で売っているのは、ブラジルの服だったり、体操服みたいなやつとか売っていますよね。なかなか商売としては面白い気がしますが、ファッション、着るものが環境に与える負荷というのが結構あるのではないかというそういう問題提起もいろいろあって。そうすると、今のような古着とウエスと反毛という三つのルートで、それが特に輸出に依存する割合が結構高いという構造の中で、これを持続可能な循環の仕組みをどう作っていくかというのは結構大きな課題のような気がするんですね。

例えば古紙、松本さんの話で言うと、回収するのにすごくコストが掛かると言うか、末端の業者にお金が行かないと回収が難しいというお話があったら、そこにお金を出す仕組みがあれば、とにかく回っていくというのが見えますけど。ポロの場合はそういうどこかにお金を突っ込んだらもっと円滑に回るとかっていうそういうわけでもなさそうな気がするのですが、その辺どうですか。もうちょっと別の言い方をすると、例えば制度的に今の容器包装リサイクル法みたいに、洋服を作ったところとか繊維産業がリサイクルコストを負担する仕組みを仮に作ったとした場合、それでも受け皿がちゃんと循環するような仕組みがないとそういうふうには回っていきませんが。そういう点で言うと、どうなんですかね。その辺、政府とか政策に対してポロの業界からの要望とか、そういったことはどんなことがありますか。

内田 やっぱり一番苦しいと言ったらいいんですかね。濡れているポロなんですね。市民や区民の方がステーションですかね。集団回収という形で持ち込まれたものというのは、まずそういった心配はないと思うのですが。出して終わりみたいな拠点ですと、出した時には雨が降っていませんでしたが、出した後、回収するまでに雨が降ったとか

ですね。雨が降っているのにそもそも出してしまったということがありまして、やっぱりそれが我々のところまで来てですね。それを含めた負担を求められるんですね。我々、お洗濯をしたり、匂いが付いたり色が移ったり、ひどいものだと2~3日置くとカビが生えるものも正直ありまして。そういったものを我々が扱うと産業廃棄物としてしか処分ができませんので、何とかその辺をしていただく仕組みがあれば、その部分は組合さんにお戻しすることができればと思います。

山本 最低限質の悪いはじいたものは、ちゃんと行政の費用で処分をしてほしいと。

内田 そこは考え方なのですが、それを何とかしてもらえないかということ、戻すの？という話になって、じゃあ戻したいですということになりますと、ごみが増えると言われるんですよ。でも、そもそも我々業界で受け取れなければ、古着は全部ごみなんですね。そのうちの7割、8割はリサイクルができていますので、10%、20%でそういう考え方をしていただければと思いますが。

山本 私も在宅で仕事をするようになると、スーツなんて今年多分冬物は2回ぐらいしか袖を通してないと思うんですね。だから買わないですよ。そうすると、女性もあまり買わないという状況になっていると思うのですが。すると、家の中で棚卸しをしたから結構出るという話がありますが、これが過ぎると発生が減るという感じですか。

内田 リーマンショックの後、これはドッと軒並み赤字決算を出しまして。これは出てこないということで思っていたのですが、減らなかったんですね。今回のコロナではということですが、古着って年間通して回収量に波がありまして。4月、5月、6月の春の衣替えですね。それから、10、11、12月の冬の衣替え。この時期にドーンと出るんですね。で、7、8、9、1、2、3月というのは半減するのですが、減りませんでしたね。思ったより減らなかったです、1、2、3月は。過去統計を我々数十年取っているのですが、その中でも実は一番多かったです。皆さん相当に古着をお持ちなのではないかと。

山本 ため込んでいるんですね。ため込んでいるのは出るけれども、新しいものは売れないと。とりあえず家の中がすっきりするから、ちょっとタイムラグがあるけど、いずれ出てくる量も少なくなるかもしれないですね。なかなか古着のボロのリサイクルというのは、いろいろな用途に使えるとはいえ、例えばウエスなんていうのも需要は順調なのですか。昔は重厚長大産業で機械工業があって、そういうところで大量に使っていたと思いますが。

内田 印刷業界はグッと減りましたね。皆さん手を真っ黒にされて必要だったのですが、今は機械のメンテナンスでパーッとやってくれますので。新聞屋さんとか印刷工場はすごく減りました。本当に半年にいったんメンテナンスで機械を外しますという時は必要ですが、常に手を拭いたり顔を拭いたりするために使っていただく状況ではなくなりましたね。

山本 かなりのものを集めて輸出されて、フィリピンの工場で選別して加工をされてと。ウエスは海外で加工されて、そのまま輸出するというビジネスですか。

内田 そうですね。

山本 日本の国内でもかなりウエスは作っているのですか。

内田 特殊ものだけ対応しています。

山本 ということは、やっぱり需要は海外ですか。

内田 そうですね。9割ぐらいフィリピンの工場生産して、日本に持ち帰っています。

山本 昔、ウエスをホームセンターで売ったらどうかという議論をしたことがあって、家庭でもっと使ってもらってもいいのではないかと。先ほどタオルも使えるという話があったけど、多分家庭からタオルは、みんなそうきんになってなかなか出てこない。むしろウエスを買って使ってもらおうとかね。という方がいいのではないかと。そういうことを議論したりしました。

内田 そうですか。

山本 反毛なんかについても、防災用の毛布というのを試験的に作ったことがあるんです。反毛で防災用の毛布を、ナカノの会長さんと一緒にプロジェクトをやって、国のお金をもらって作ったんだけど、びっくりしたのは防災用の毛布というのは不燃性じゃないと駄目だっていう。馬鹿馬鹿しいと思ってね。どこで使うんだろうって思うんだけど、防災用の備蓄の毛布というのは、そういう業界の厚い壁があって、普段お布団屋さんで売っているものとは違う規格になっているというのを初めて知りましてですね。公共事業で反毛を使うようなね、そういうことをやったらどうかと思って、防災備蓄用の毛布というのを開発と言うか、作ってみただけど、消防庁の許認可が下りないと。不燃性の毛布というのはどういうものなのかさっぱり分からないのですが、そういう業界があ

って下りないことが分かって断念をしたことがあるのですが。だからもうちょっとこう国内での需要の開拓とか、そういうことも私は工夫してもいいのかなという気がするんですね。みんな海外に持っていただけじゃなくて。衣類そのものは今サブスクとかもなかなか難しいんだけど、貸してあげますというビジネスが出てきたり長く使うとか、何かだんだんそういう方向も少し見えています。リサイクルという受け皿がなかなか国内にないということと言うと、もうちょっとその辺を市民と一緒に開拓できないかなという気がします。最後に一つ提案か何かありますか。大勢の方が聞いておられると思いますので。

内田 なかなか魅力のある再生品って言うんですかね。我々業界・企業として発信ができないところに消費者の方が選択肢として選んでいただけることが少ないのかなとも思います。実際のところ山本さんから話をいただいた、災害備蓄用ではなくて、社内の備品として使っていただけないかというご提案をして、何とか成立した案件もあるのですが、なかなかメジャーにはまだなっていないですね。その企業の制服を我々の方で毛布転換って言うんですかね。作り替えて、お戻しをしたりして。あとはコースターとか、屋上緑化用のフェルトですね。水を多分に含めるフェルトですとか、そういったことを考えながら、少しずつ。コースターとかですね。コースターがしかもパズルになっているとかですね。あとは定規とかですね。あとはカッシーナさんとコラボして椅子を作ったこともあります。1脚 15万円ぐらいしましたけど、なかなかこれは普及しないだろうと。フェルトを座面と背もたれに使って、いい形をしていたのですが、それを日本人の我々が 15万円で、いいわね、買いましょう、ってなるかということ。まあそんなことをしながら、何か面白い商品と言うか、魅力的なものが生み出せないかなと考えると、コロナは厳しいなということがありまして。松本さんがおっしゃっていましたが、コンテナが今年の 4 月、5 月、6 月という状況ではなくなってしまいそうな懸念さえありますので、そこを心配しつつ、でも心配ばかりしていてもしょうがないので、何かをしようと。

山本 どうもありがとうございました。いろいろな意味で厳しいのですが、何とかこれを乗り越えていかないとしょうがないので、またいろいろ皆さんとぜひ知恵を出し合えるような機会を作れるといいなと思います。今日は今の古着のリサイクルの実態をお話をさせていただきました。どうもありがとうございました。